

第一章 投影された英国

5

第二章 戦う英国をいかに描くか——「船団最後の日」にいたるまで

24

第三章 バルコンと新生イーリング

69

第四章 「われわれの進むべき道」——「夢の中の恐怖」の功罪

87

第五章 イーリング・コメディの誕生——エース脚本家T・E・B・クラークと「ピムリコへの旅券」

136

第六章 豪快なマキアヴェリズム——マッケンドリックの「ウイスキー大尽」

187

第七章 イーリング・コメディの孤峰——ロバート・ヘイマーの「優しい心と宝冠」

209

第八章 無垢と愚かさの寓話——マッケンドリックの「白服の男」

232

第九章 沈滞と再生と——「黄金の檻」「マンデイ」

260

第十章 イーリング・コメディ最後の光芒——「テイトフィールド雷電号」「マギー」「マダムと泥棒」

276

第十一章 終焉

301

エピローグ 映画からテレビへ

314

補遺一 一九九三年に振り返る

317

補遺二 イーリング後のマイケル・バルコン

332

マイケル・バルコン製作によるイーリング全作品のフィルモグラフィ——350

イーリング人名録——378

謝辞——385

訳者あとがき——386

索引——407

るロンドンまで出向き、一団となって陳情し、お偉方たちの翻意をうながすのである。ひとりの坑夫のことがメッセージを鮮明に伝えている。

「戦時下にあつては石炭は国の防衛力の一部であり、銃やその他のどんなものとも重要さにおいて変わるところはない。だからわれわれにつるはしを持たせてほしいんだ」

このようにして『誇り高き渓谷』は、軍にせよ民間にせよ、国民の一部が全体に対してどのような貢献をなし得るかをドラマ仕立てにする、イーリング製戦時体映画の最初の本となったのである。戦う英国を描くイーリングの映画、ならびに他の撮影所の映画から、私たちは、将校と兵、雇用者と労働者が共同体を守るために一致協力するという統合された国民のイメージを取り出すことができる。しかしこの種の映画は徐々に作り上げられていったものであった。開戦当初にこのようなタイプの映画は存在しなかったし、このような映画が描く現実もまた、どこにも目にすることはできなかつた。このような国民的結合の感情が戦時下において神話以上のも

のであつたことを強く主張しているいくつかの記述ですら、それが一定不変のものでもなければ、時の影響を脱したものでもなく、そうではなくて、戦争初期の特定の力が作用した結果そのような感情が生まれたと言明している。そのようなわけでA・J・P・テイラー（一九〇六―一九〇、英国を代表する歴史家、ヨーロッパ近現代史の専門）は戦争中期の数年を「英国国民が自分たちの社会を真に民主的な共同体と実感していたつかの間の時期」と呼んだのであり、ここではそのような感情が実在したこのみならず、それがほんの短期間であつたことに力点がおかれていた。それ以前にテイラーは「目をぎゅつとつむって、あとずさりして戦争に突入していった英国政府」について語っており、そこでは、とりわけ石炭業界における、内部分裂についても触れられている。『誇り高き渓谷』は、分裂がどの程度のものであるかだけでなく、変革への意志が存在することをも描いていたのである。

代表団がロンドンに向けて出発するさい、村の人々は職を振り、歌を歌って、総出で見送りをする。共同体の団結心の



「誇り高き渓谷」(40)のポール・ロブスン(右)。「団結する国民」のイメージが姿をあらわしはじめる

感動的な表出であり、その矛先はまっすぐ親会社に向けられている。代表団はロンドンまでの路銀を稼ぐために、行進しながら歌を歌い、通りすがりの人たちから金を恵んでもらう。この箇所はグレイシー・フィールズの代表作で、不況下のランカシャーを舞台にした『進みながら歌え』(三四)のタイトルと精神を思い起こさせる。代表団がロンドンに近づく頃になると、ヒトララーの動向を伝える新聞の貼り紙のシヨットが繰り返し挿入される。観客の目の前で、炭鉱経営陣に対する敵対心がドイツに対する憎しみにおきかえられるのである。このシーンは一九三九年の時点において何がなされなければならなかつたかを端的に伝えている。この共同体的精神、いかにすれば緊密に結ばれた社会の復元力は——一部には三〇年代のグレイシー・フィールズやジョージ・フォーンビーの Comedy をとおしてイーリングが常時関わりをもっていたものなのだが——つねにそこに存在していたのであり、それを活用する手だてを見つけたしさえすればひとつの大きな長所となるものであつた。しかしまだ時期は満ちていなかった。

れる。この団結には将校階層は含まれていない。彼らはおもに官僚であり、売国奴であり、スパイなのである。危機を招く要因となっているのは英国人の自己満足的安心感であり、そこがスパイや敵にとって英国側の結束を突き崩すスキとなっている。この映画で観客をあつといわせる箇所は、フランスで出会った一見非の打ち所のない英国人将校が、(すすんでグループを手助けし、グループの面々も喜んでその援助を受けるのだが)じつは敵のスパイであったとわかるところである。同様の事態は、一九四二年の春に撮影されたイーリング撮影所の次の戦争映画『昨日はいかに?』においてもつと拡大されて描かれる。

『昨日はいかに?』に登場するのも魅力的な地域共同体である。舞台となるのはイングランドのさる小さな村で、幹線道路からは遠く切り離されていて、車が一台訪れるだけでも大ニュースになるところである。村いちばんの大地主<sup>スワイア</sup>、教区司祭、莊園領主夫人を名士にいたたくこの村では、下は密猟者の老人にいたるまで誰もが自分の分というものをわき

まえている。村の守りは土地の若者たちで構成される国土防衛隊(一九四〇年五月に組織された、ドイツ軍の侵襲にそなえるための無給の市民軍)にまかされている。予告もなく陸軍の一小隊が秘密の訓練と称してやってきて、村に駐屯する。この小隊の態度ふるまいにいろいろと怪しい点が目につきはじめ、われわれ観客にも村人たちにも、彼らが夜間にパラシュートで侵入したドイツ兵であるらしいことがわかってくる。正体をあらわしたドイツ兵は村を制圧するが、隣村に知らせが届き、英国側の逆襲にドイツ軍は壊滅する。

監督であるカヴァルカンティへのインタビュ(「サイト・アンド・サウンド」誌)でこの映画に触れたエリザベス・サセックスは、物語の終盤、ドイツ軍に逆襲する村人たちの冷酷さにとくに注目し、こう語っている。「この血も涙もない復讐はとてもショッキングです。この男たちを村人ははじめ賓客として遇していたのですよ。司祭館や、莊園領主の邸宅や、それぞれ兵隊を受け入れた家々で」。そしてカヴァルカンティのことばはというと「このうえなく親切な心根の人たちが、それがここではイングランドの小さな村の住人



『昨日はいかに?』(42)。イングランドののどかな村がドイツ軍に襲撃される

なんです、戦争というものに触れるやいなや、怪物に变身してしまうのです」

これは着眼点がまったくずれているように思われる。サセックスはあたかも接待する村人側に問題があるかのようになっているが、客人側こそじつは冷酷非情な敵兵だったのであり、復讐は残酷な暴力行為であるよりは、痛ましい犠牲をだしたあとの、一刻を争う防衛戦として描かれている。製作から三〇年後のカヴァルカンティのことば「(この映画は)心から平和主義的性格」というのも、どうみても映画の内容とは矛盾している。この映画が平和主義でないのは『わらの犬』がそうでないのと同じであり、この比較は『昨日はいかに?』の価値をいささかも傷つけるものではない。「昨日はいかに?」はイーリングの他の二作と同じく、観客をほらはらさせながら英国人の自己満足的安心感を戒めるという、戦争初期段階の教訓話として機能している。敵兵の正体が少しづつ明らかになるのに村人がなかなか気づかない、外の世界に助けを求めようとしても思いついた行動に踏み切れない。

マイケル・バルコン製作による  
イーリング全作品のフィルムモグラフィー

イーリングにおいて作られた、あるいはイーリング社のために作られたマイケル・バルコン製作の全作品。九五本の長篇劇映画の詳細を年代順に以下に掲げる。各作品の冒頭に記した年月は、可能な限り、(たいていの場合)ロンドンにおいて「最初に一般公開された」年月を指している。スタッフ欄ではバルコンの名前は省略した。スクリーン上、彼の名はつねに「製作者」producer、あるいはそれより頻度は少ないが、「製作総指揮」executive producerとクレジットされていたからであり、後者の場合、製作者のクレジットは別の誰かがしめていた。同様に、「製作会社」イーリング・スタジオも省略した。ただし初期の映画のなかにCAPAD製作、あるいはATP製作とことわってあるのが何本かある。CAPADとは一九三〇年代後期、バルコンが主要メンバーとなっていた独立映画人たちの共同企業体「製作者と配給業者の共同組合」Cooperative Association of Producers and Distributorsを、ATPとはバジル・ティーンが設立したイーリングにベースをおく会社(四頁参照)アンシエイティッド・トーキング・ピクチャーズ Associated Talking Picturesを意味してゐる。バルコンが所長となつた当座のドラマの映画にはCAPADが、コメディにはATPの冠が付けられて

いる。イーリング内のバルコン体制が確立すると、すべての作品はたんに「イーリング・スタジオ製作」an Ealing Studios productionとだけクレジットされる。そうなるのは一九四〇年のはじめに作られた「護衛艦」以降であるが、ジョージ・フォーンビーものの最後の二本は例外となつてゐる。

一九三八年一月

◆やせさらばえた男 *The Gaunt Stranger* 七三分 CAPAD

監督ウォルター・フォード 製作補S・C・バルコン 脚本ジドニー・ギリアット 原作(戯曲)エドガー・ウォレス 撮影ロナルド・ニーム 編集チャールズ・ソーンダーズ

出演ソニー・ヘイル、ウィルフリッド・ローソン、ルイーダ・ヘンリー、MGMを離れて独立プロデューサーとなつたバルコンにとつて最初の、またイーリングにおける彼の最初の作品で、舞台と数度の映画化で人気のほどは保証されているエドガー・ウォレスの舞台劇のあらためての翻案である。舞台劇の頑丈な骨格と推理もの特有の常套的プロットに、脚本を担当したギリアットが業を煮やしたといわれているが、それでもこれは、二度めの映画化で他よりも傑出している「四人の正義漢」のように、政治的背景が当時の時代をうかがわせる魅力的な作品である。物語の中心人物はナチ的性格の暴君(ローソン)で、暗殺されるのだが、暗殺者は捕まりもしなければ罰せられもしない。

一九三八年二月

◆ウェヤ殺人事件 *The Wane Case* 七九分 CAPAD

監督ロバート・ステイヴンソン 製作補S・C・バルコン 脚本R・ステイヴンソン、ローランド・パートウィー 原作(戯曲)G・P・

バンクロフト 撮影ロナルド・ニーム 編集チャールズ・ソーンダーズ 出演クライヴ・ブルック、ジェイン・バクスター、バリー・K・バーンズ 広告を見ると、人気を博した原作舞台劇をセルルスポイントにしているが、そのようなやり方はしだいにイーリングの作風とはかけ離れたものとなつていく。主人公サー・ヒューバートの役はジェラルド・デュ・モリーリの当たり役となつていたもの。大邸宅の外景はパインウッド撮影所で撮られている。「日本公開一九四六年二月」

一九三九年三月

◆有名になろう *Let's Be Famous* 八三分 ATP

監督ウォルター・フォード 脚本ロジャー・マクドゥーガル、アラン・マッキノン 撮影ロナルド・ニーム 編集レイ・ピット

出演ジミー・オデイ、ベティ・ドライヴァー、ミルトン・ロスマー 主役を演じたジミー・オデイをはじめとする多くのスタッフ、キャストが、半年後に公開される『歓呼を、もつと歓呼を』に関わつてゐる。『有名になろう』は凡作ではあるが、一点興味深い面がある。第一点は、当時のBBCを描いていること。BBCの尊大さ、広告業界の俗悪さ、イングランド北部出身のヒロインの純真さが、物語のなかで一種の三角関係を構成している。第二点は、この時期のイーリング映画に特徴的な世代間対立があらわれていること。ミルトン・ロスマー演じる人物は、仕事では非情、家庭では厳格。そしてメディアを自社の宣伝に利用するのだが、家族にはけつしてメディアと関わりたくない。

一九三九年三月

◆トラブル発生中 *Trouble Brewing* 八七分 ATP

監督アンソニー・キミンズ 製作ジャック・キッチン 脚本A・キミンズ、アンガス・マクフェイル、マイケル・ホーガン 撮影ロナルド・ニーム 編集アーネスト・オールドリッジ

出演ジョージ・フォーンビー、グーギー・ワイザーズ、ガス・マクノークレジットはティーン時代のフォーンビー作品の延長のようにみえる。所長がバルコンに替わつてもほとんど態勢に影響がおよばなかつたのがこの分野である。

一九三九年六月

◆四人の正義漢 *The Four Just Men* 八五分 CAPAD

監督ウォルター・フォード 製作補S・C・バルコン 脚本ローランド・パートウィー、アンガス・マクフェイル、セルゲイ・ノルバンドフ 撮影ロナルド・ニーム 編集チャールズ・ソーンダーズ 出演ヒュー・シンクレア、グリフィス・ジョーンズ、フランシス・L・サリヴァン

本書を書き終えたあとで、初めて見る機会を得た映画。三〇年代末のイーリング作品らしく、頹廃した支配階級が容赦ない攻撃にさらされる。四人の正義漢の標的となるのは、宥和政策の推進者で国賊でもある、高位の政治家サー・ヘイマー・ライマン。宥和政策は国家に対する背信行為であるとの意味合いが伝わってくる。四人は好戦的愛国者の秘密グループを結成して、外見は普通の社会人であること、いわゆる力を誇